

紅葉 (もみじ)

秋の夕日に 照る山もみじ
濃いも薄いも 数ある中に
松をいろどる楓 (かえで) や薫 (つた) は
山のふもとの 壁模様 (すそもよう)
渓 (たに) の流に 散り浮くもみじ
波にゆられて はなれて寄って
赤や黄色の 色さまざまに
水の上にも 織る錦 (にしき)

旅愁 (りょしゅう)

更け行く秋の夜 旅の空の
わびしき思いに 一人なやむ
恋しやふるさと なつかし父母
夢路(ゆめじ)にたどるは 故郷(さと)の家路
更け行く秋の夜 旅の空の
わびしき思いに 一人なやむ
窓うつ嵐に 夢もやぶれ
遙(はる)けき彼方(かなた)に こころ迷う
恋しやふるさと なつかし父母
思いに浮かぶは 杜(もり)のこずえ
窓うつ嵐に 夢もやぶれ
遙けき彼方に 心まよう

故郷 (ふるさと)

兎 (うさぎ) 追いし かの山
小鮎 (こぶな) 釣りし かの川
夢は今も めぐりて
忘れがたき 故郷 (ふるさと)
如何 (いか) に在(います) 父母
恙 (つつが) なしや 友がき
雨に風に つけても
思い出 (い) する 故郷
志 (こころざし) を はたして
いつの日にか 帰らん
山は青き故郷 水は清き故郷

里の秋 (さとのあき)

静かな静かな 里の秋
お背戸 (おせど) に木の実の 落ちる夜は
ああ 母さんとただ二人
栗の実 煮てます いろりばた
明るい明るい 星の空
鳴き鳴き夜鶴 (よがも) の 渡る夜は
ああ 父さんのあの笑顔 (えがお)
栗の実 食べては 思い出す
さよならさよなら 椰子 (やし) の島
お舟にゆられて 帰られる
ああ 父さんよご無事 (ごぶじ) でと
今夜も 母さんと 祈ります

小さい秋みつけた

誰かさんが 誰かさんが 誰かさんが みつけた
小さい秋 小さい秋 小さい秋 みつけた
めかくし鬼さん 手のなる方へ
すましたお耳に かすかにしました
呼んでる口笛 モズの声
小さい秋 小さい秋 小さい秋 みつけた
誰かさんが 誰かさんが 誰かさんが みつけた
小さい秋 小さい秋 小さい秋 みつけた
お部屋は北向き くもりのガラス
うつろな目の色 とかしたミルク
わずかなすきから 秋の風
小さい秋 小さい秋 小さい秋 みつけた
誰かさんが 誰かさんが 誰かさんが みつけた
小さい秋 小さい秋 小さい秋 みつけた
昔の 昔の 風見の鳥の
ぼやけたトサカに ハゼの葉ひとつ
ハゼの葉赤くて 入日色 (いりひいろ)
小さい秋 小さい秋 小さい秋 みつけた

赤とんぼ

夕焼小焼の 赤とんぼ
負われて見たのは いつの日か
山の畠の 桑(くわ)の実を
小籠(こかご)に摘(つ)んだは まぼろしか
十五で姐(ねえ)やは 嫁に行き
お里のたよりも 絶えはてた
夕焼小焼の 赤とんぼ
とまっているよ 竿(さお)の先

どんぐりころころ

どんぐりころころ どんぶりこ
お池にはまって さあ大変
どじょうが出て来て 今日は
ぼっちゃん一緒に 遊びましょう

どんぐりころころ よろこんで
しばらく一緒に 遊んだが
やっぱりお山が 恋しいと
泣いてはどじょうを 困らせた

野に咲く花のように

野に咲く花のように 風に吹かれて
野に咲く花のように 人をさわやかにして
そんなふうに 僕たちも
生きてゆけたら すばらしい
時には暗い 人生も
トンネル抜けければ 夏の海
そんな時こそ 野の花の
けなげな心を 知るのです

野に咲く花のように 雨に打たれて
野に咲く花のように 人をなごやかにして
そんなふうに 僕たちも
生きてゆけたら すばらしい
時にはつらい 人生も
雨のちくもりで また晴れる
そんな時こそ 野の花の
けなげな心を 知るのです

四季の歌

春を愛する人は 心清き人
すみれの花のような ぼくの友だち

夏を愛する人は 心強き人
岩をくだく波のような ぼくの父親

秋を愛する人は 心深き人
愛を語るハイネのような ぼくの恋人

冬を愛する人は 心広き人
根雪をとかす大地のような ぼくの母親

夕焼け小焼け

夕焼小焼で 日が暮れて
山のお寺の 鐘 (かね) がなる
お手々つないで 皆 (みな) かえろ
鳥 (からす) と一緒に 帰りましょう
子どもが帰った 後からは
円 (まる) い大きな お月さま
小鳥が夢 (ゆめ) を 見る頃は
空にはきらきら 金の星

上を向いて歩こう

上を向いて歩こう
涙がこぼれないように
思い出す春の日 一人ぼっちの夜

上を向いて歩こう
にじんだ星をかぞえて
思い出す夏の日 一人ぼっちの夜

幸せは 雲の上に
幸せは 空の上に

上を向いて歩こう
涙がこぼれないように
泣きながら歩く 一人ぼっちの夜